

2024(令和6)年 4 月号～2025 年 2 月号

The Karuizawa Museum of History and Culture

軽井沢町 歴史民俗資料館だより

かるいざわまち れきしみんぞくしりょうかん

〒389-0111 長野県北佐久郡軽井沢町大字長倉 2112-101 TEL (FAX) 0267-42-6334

内容

2024(令和6)年 4 月号.....	2
2024(令和6)年5月号	5
2024(令和6)年 6 月号.....	6
2024(令和6)年 7・8 月号.....	8
2024(令和 6)年 12 月号	10
2025(令和 7)年 1 月号	12
2025(令和 7)年 2 月号	14

2024(令和6)年 4 月号

特集 「石仏」と常設展示テーマについて

開館（2024（令和6）年4月2日（火）～）のお知らせ

当館は、昨年11月16日より冬期休館しておりましたが4月2日（火）から開館しております。休館日は毎週月曜日です。

さて、当館の展示室に入ってすぐにある真正面の巨大パネルには「道は、時代を無言のうちに物語る…ひんがしの山道（古東山道）・東山道・中山道一」という言葉が掲げられています。当館は「道の文化史」を基本テーマに据えています。縄文時代から近代にいたるまでの道に注目しています。江戸時代の参勤交代や、旅人、行商人など移動する人びとを支えた地域に築かれた独自の文化を、実物資料をもとにさぐることができます。



写真：2024年4月撮影「第1展示室入口」編集済

【歴史民俗資料館にある石仏】

展示室に入ってすぐ目につくのは、左手に丸で囲んであります、石造の角柱「馬頭観音兼道標」と石仏「聖観音/持蓮観音」でしょう。ここに展示される以前は、道沿いにたたずみながら、人び

とや馬、動物たちの歩みを見守ってきたと考えられます。これらは、本来ならば建立された場所にあるべきものたちですが、当館で展示されているのはなぜなのでしょう。



写真：2024年4月撮影「歴史民俗資料館に展示されている聖観音」

1体の仏像をもとに説明していきたいと思います。

その背景は、1981（昭和56）年11月10日の『信濃毎日新聞』の「高原調」という小さな記事のコーナーに書いてありました。

「軽井沢町千ヶ滝の別荘の庭に、新聞紙に包んだ石仏が捨てられているのを管理人が見つけた9日に、町教委に届け出た。

石仏は縦六十センチ横30センチ 上部とがった石に像が彫られている。帽子をかぶり、ほうきのようなものを背負った姿。腰には紐で縛ったような模様も。

石仏には製造年月日などが刻まれている例が多いが、文字らしきものは一切無い。～（後略）」

たくさんの石仏がこれまで様々な受難にあってきました。明治の初めの頃に行われた「廃仏毀釈」による破壊行動、戦後に頻発した盗難被害、開発工事や、自然災害などによる影響も深刻です。歴史民俗資料館では、そうした石仏を保護する場所としても機能してきました。



写真：2024年4月撮影「聖観音の拓本」

当時の職員が拓本をとるなどして、石仏の出自を解明しようとしたのですが、結局判明には至っていません。

当館では、このほかに10基(体)ほどの石仏が保護、展示されています。石造文化財は、さまざまな人びとの願いが込められています。特に軽井沢町は、古東山道、東山道、中山道のほか入山峠、和見峠、碓氷峠などの峠をかかえていることから、石造文化財が数多く存在する地域です。当館で「道の文化史」について学んだのち、ぜひ散策しながら石造文化財を見つけてみてください。

(歴史民俗資料館 学芸員蒲原)

特集 「軽井沢における水道事業 ～木製水道管(もくせいすいどうかん)編」

わたしたちの暮らしに欠かすことのできない水。清潔な水を安定して、各家庭・学校・病院・会社などに供給しようと、これまで様々な工夫が、先人たちによってなされてきました。軽井沢における水道事業の歴史について、当館所蔵の資料をもとにひも解いていきます。

●別荘開発のなかで行われた水道事業

大正7年(1918年)、堤康次郎が千ヶ滝(せんがたき)の開発に着手し始めました。「千ヶ滝遊園地株式会社」を設立し、水道敷設工事、共同浴場の整備など本格的な別荘地開発をおこなっていきます。

このとき、水道敷設工事に使われたのが「木製水道管」です。

「水道管は6尺(約1.8m)の松の丸太をくりぬいたものをつなぎ、道路の十字路ごとに直径6尺の桶を地面にうめて水をため、各別荘へは手桶(ておけ)・水汲桶にて運んだ」(町誌243頁)といわれています。

蛇口をひねれば簡単に水が出るような、現代の画期的な水道とはもちろん異なりますが、木の中心をくり抜き、つなぎ合わせるという手の込んだ技術によって、水道敷設事業が進められたことが分かります。

水道のほかにも道路や、バスの運行、電気、浴場など避暑生活を快適に送る条件が整っていきます。このことは、それまで旧軽井沢周辺に分布していた別荘地が、町全体に広がっていききっかけにもなりました。

次号では、大正15年(1926年)の軽井沢町の施策による上水道敷設について取り上げ、水道事業にみる地域の歴史を追います。



写真：2024年5月1日撮影 歴史民俗資料館蔵「木製水道管」

- (1) 立てかけられているのは、中軽井沢北部で発見されたものと伝えられている。恐らく、先の千ヶ滝開発によるものかと思われる。
- (2) 横たわる太い木製水道管は、平成17年(2005年)に新軽井沢地区矢ヶ崎の地中1m20cmから発掘した。明治時代～大正時代の

ものと推定。

(学芸員 蒲原)

2024(令和6)年 6 月号

特集「軽井沢における水道事業～上水道創設編」

前回「5月号」では別荘地開発における水道事業と、そこで用いられた「木製水道管」について取りあげました。今回は、軽井沢町における水道創設について注目していきます。

大正12(1923)年に町制施行し、町としてスタートしたばかりの軽井沢町において、水道事業は、大規模かつ特別な事業でした。その時のことは、『軽井沢町報』(4号、大正14年)が、「軽井沢町上水道布設 三部落とも近く実現。布設の暁には衛生火防共完備されん」と大きく伝えています。

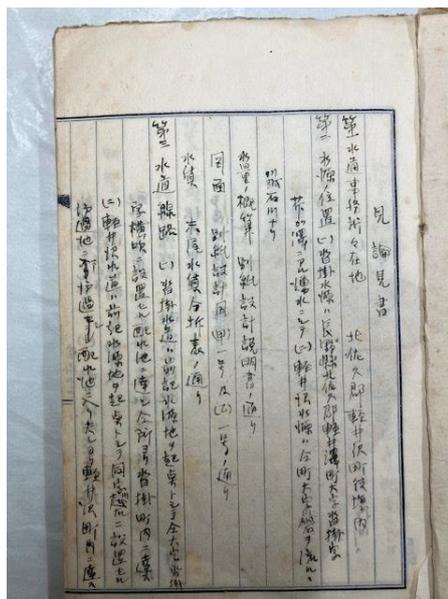
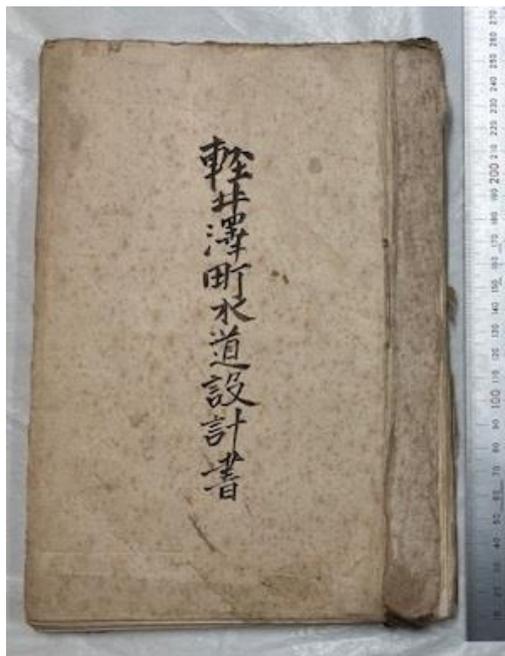
この事業の背景には、清潔で大量の水を供給することで衛生と火災への対策を強化したい、ねらいがありました。町は「他町村と違い夏季は各宮殿下を始め貴紳士多数来軽(らいけい)せらるるため特に衛生火防等の施設宜しきを要する」と避暑地特有の意義を示しました。

くわえて、近接する小諸町(現小諸市)では大正13(1924)年に、他近隣町村に先駆けて水道が創設されています。先例があったことも、事業の推進を後押ししました。実際に「軽井沢町会が、一足先に水道事業を行っていた小諸町水道部を施設に訪れ、具体的な事業方針を立てた」とも記されています。小諸町の事業を参考にして、かかる費用と経営方法を考えていきました。

●『軽井沢町水道設計書』

水道創設に向けた設計書が、令和5年度の冬期期間中の資料整理のなかで発見されました。創設時の詳細な記録が残る貴重な地域資料です。この事業は、「西部沓掛方面には、芹ヶ沢に水源を求め沓掛水道を布設し、東部には川越石の川越石川を水源として軽井沢水道を布設し、離山、旧軽井沢、新軽井沢、矢崎(矢ヶ崎)等に給水する設備とする」と記されています。創設時は、広大な軽井沢町のなかで別荘戸数の多い地域が優先されたことが分かります。この2つの水源から給水することが、当初の事業目標だったのです。

なお、送水管はおもに鑄鉄管が用いられることとなりました。木製から鉄製へと水道管として使用する材質が変化したことも分かります。



歴史民俗資料館所蔵資料

資料整理番号 ID2323013

表題 軽井沢町水道設計書

かるいざわまちすいどうせっけいしょ

寸法 (cm) 24.0×16.7

制作年月日 大正 14 年 (1925)

備考 飲料水試験成績書

軽井沢町図書館デジタルアーカイブ

資料 ID m p 100050

表題 『町報』4号

刊行 大正 14 年 (1925 年) 10 月 20 日

(学芸員 蒲原)

2024(令和6)年 7・8 月号

特集「下肥(しもごえ)と民具」

今年度は「水と暮らし」を大きなテーマに当館所蔵の資料を紹介しています。7・8月合併号では下水にかかわる「下肥」(しもごえ：人間の尿や糞を肥料にしたもの)と民具について取りあげます。

70年ほど前の日本では、人糞尿を発酵させて肥料とし、農作物育てるために利用することはまだ一般的なことでした。道を行けば、肥桶を担いで下肥を運ぶ人の姿もみられました。軽井沢町においても、当時使われた民具資料が残されています。また、当時の小学生が「こえかつぎ」「こえおけを洗っているところ」といった戦後の版画作品を残していることから、当町も例外ではなかったことがわかります。

7・8月合併号では「下肥」(しもごえ：人間の尿や糞を肥料にしたもの)と民具について取りあげます。



作品画像は、昭和28年度の卒業生たちが卒業前に制作した版画集です。ありのままの生活を描いた戦後の児童版画は、地域社会を知るうえで重要な歴史的資料となっています。

(収蔵品展「8/9～11/15 浅間山とともに生きる —1950年代の軽井沢—」にて現在展示中)

児童版画集『竹の子 2』1954年3月18日、軽井沢東小学校6年白組発行

田久保(土屋)和子氏寄贈 軽井沢町歴史民俗資料館蔵

肥桶(こえおけ)・肥柄杓(こえびしゃく)

柳沢善次郎作「こえかつぎ」、土屋享一作「こえおけを洗っているところ」で描かれた民具を紹介します。



肥桶（こえおけ）、天秤棒/肥柄杓（こえびしゃく）・肥汲み杓

※画像は採取した当時の担当者撮影のもので、サイズを示すためにタバコの箱を用いている点が1980年代の当時の状況を表しているように思います。

歴史民俗資料館資料 ID 民具 552.565 .562

採取日 昭和56年3月3日

寄贈者 木村

肥桶は、し尿を運ぶ容器の総称です。家から比較的に近い田畑に運ぶ場合は、一对の桶を天秤棒で担ぐ方法がとられました。この場合蓋がないのがふつうでした。（『日本民具大辞典』199頁参照）肥柄杓は、画像のものは柄が長いので、底の深い溜め桶からし尿をくみ上げて、肥桶に移す「肥汲み杓」と考えられます。

寄贈者の家族・菊池氏の証言（昭和57（1982）年5月2日）が資料台帳に記録されていたので紹介します。

「昭和17（1942）年、東京都武蔵野市より軽井沢の別荘に疎開する。千ヶ滝西区、家を含めて500坪のところではソバを栽培した折の農具である。戦後まで使用し、その後納屋に保管されていた。」

これらの民具が疎開先である軽井沢で、実際に使用されていたことを裏付ける証言です。しかし制作元が、疎開前の武蔵野市か疎開先である軽井沢、佐久地方のものかは不明とのこと。70年ほど前までは、人のし尿は農作物を育てるための貴重な肥料でした。しかし、急速に「下肥」の文化は下火になります。そうした変わっていく暮らしの風景が、資料として残されていることに注目していきたいと思います。

（学芸員 蒲原）

特集 「休館中の資料整理(古地図編)」

江戸時代の絵図は用途や目的に応じて、正確な縮尺や地形などにこだわらずに描かれています。当館所蔵資料ですと、助郷絵図がその代表例です。各宿場町と助郷村を色分けでわかりやすく彩色しています。



歴史民俗資料館蔵 ID20240205 たて 32.0 c m × よこ 46.5

※複製を常設展示中 作成年月日詳細不明

明治時代に入ると地租改正（明治6年）という国をあげた、近代化に向けた大事業が開始されます。その影響で土地をめぐる確かな資料として地図が求められ、作成されました。それらは耕地や、山林、道、水路、河川など地目ごとに鮮やかに彩色されています。当館に所蔵されている多くの古地図もそうした背景のなかで描かれたものと考えられます。また時代とともに測量技術



が向上し、より正確に厳密な地図が描かれるようになります。地図の歴史をふり返ることで、地域社会の変容や人々の技術の変化を知ることができます。

- ・ (左) 2024 年 11 月 25 日撮影 資料に目を凝らす文化振興係の職員たち
- ・ (右) 2024 年 11 月 25 日撮影 収蔵庫から取り出してきた整理を待つ地図

2023 年～2024 年にかけて歴史民俗資料館では地図の整理作業を進めています。

その成果が以下のとおりです。

資料 ID	年代	西暦	地図名
KO202433	明治 29 年 1 月	1896 年 1 月	長野県北佐久郡東長倉村大字全図
202310001	明治 28 年	1895 年	北佐久郡東長倉村大字長倉全図一号
202310002	明治 28 年	1895 年	北佐久郡東長倉村大字長倉全図二号
202310003	明治 28 年	1895 年	北佐久郡東長倉村大字長倉三冊之内式号
202310004	明治 28 年	1895 年	北佐久郡東長倉村大字長倉三冊之内参号
202314001	明治 28 年	1895 年	第 85 番字殿尾～第 89 番字九蔵全図
202402002	明治 26 年	1893 年	北佐久郡西長倉村大字長倉全図
202402003	明治 27 年	1894 年	北佐久郡西長倉村大字発地全図
202402006	昭和 21 年	1946 年	軽井沢■■■字名図
202402007			軽井沢町 {大字軽井沢・大字峠} 小字一覧図
202402008			軽井沢町大字長倉小字一覧図 縮尺 一万二千分ノ一
202402009			信濃国北佐久郡西長倉全図 縮尺一万五千分之一 西長倉村水路調査箇所一覧図
202402010			[長倉村小字一覧写図か?]
202107001	昭和 28 年	1953 年	軽井沢全図其の二(一万二千分ノ一)

■歴史民俗資料館の資料 ID って？

○ 「202402008」

(2024) 年に整理した (2) つめの資料群から (8) 番目という意味です。

○ 「KO202433」

は歴史民俗資料館で「2024」年に購入「KO≡購入」した 33 番目の資料という意味です。

(学芸員・蒲原)

2025(令和7)年1月号

○冬期休館のお知らせ

休館中、歴史民俗資料館では、常設展示替えや資料整理などを実施しています。学校利用、団体利用等で見学を希望される方は恐れ入りますが当館へ事前にご連絡ください。(0267-42-6334)

○【予告】3/22(土) かるいざわ歴史・文化講座開催のお知らせ

題目：「峠の祭祀 古東山道、東山道を往く～入山峠祭祀遺跡～」

講師：長野県立歴史館 考古資料課長 櫻井秀雄氏

場所：ギャラリー蔵（歴史民俗資料館から100m先）

定員：50名程度（どなたでもご参加できます）

【概要】

標高1000mを超える場所に、古墳時代の人々による祭祀の痕跡が見つかりました。日本で3カ所しか発見されていない峠の祭祀遺跡のうち一カ所が、ここ長野県軽井沢町に残されています。

（なお群馬県との境に位置するため。群馬県側、長野県側の双方で調査がなされました。）入山峠祭祀遺跡（いりやまとうげさいしいせき）といいます。古代の人びとの神に対する意識や行動を分析するうえでも重要であり、また古東山道、そして東山道という古代の主要な道の存在を明らかにするうえでも重要な遺跡です。近年は櫻井秀雄氏の研究によって峠の祭祀遺跡の解析が進められています。本講座を通じて新しい研究成果を広くみなさまと共有したいと考えます。



（写真：当館所蔵の入山峠祭祀遺跡の一部 2024年9月9日撮影蒲原）

○冬期休館中の資料整理（音声・映像資料編）

当館にはおよそ500～600ほどの音声・映像資料があります。過去に一般販売されたものから、町の職員が講演会の音声を録音したテープなど内容はさまざまです。当館の資料整理にあたっては、形態ごとに分類しています。音声資料は、レコード（LP・SP・ソノシート（フォノシー

ト))、カセット(マイクロカセット)、S o n i -Tape、8トラック方式カートリッジ、CDなど。映像資料においては、16mmフィルム、ビデオテープ、DVDなどがあります。

今後どのように音声や映像を、未来へ残していくか。長期保存できる方法を模索していきます。

○特集 1950年代の肥料をめぐる農業の変容と地域資料 ～清浄野菜～

【収蔵庫】
から



左図は1956年に清浄野菜(せいじょうそさい)をうたい、出荷していたことを示す軽井沢で使用された商札です。「信州」の白文字とあわせてイラストの噴煙をあげる浅間山、白菜・キャベツ(かんらん)が描かれています。

「清浄野菜」という言葉は、今でこそ一般に馴染みはありませんが、この商札が使用される約1年前の1955(昭和30)年に厚生省から「清浄野菜の普及について」が発表されました。当時、「清浄野菜(野菜)」は、国をあげた事業として推し進められていました。その背景には、寄生虫による病気が社会的に問題になり、下肥を用いた栽培にも原因があると判断されたことが理由に挙げられます。※ただし、適切に処理された下肥の利用は認められました。

その当時、軽井沢では明治時代より外国人避暑客向けにキャベツ(かんらん)栽培が盛んに行われていました。『軽井沢町誌 歴史編(近現代)』262頁参照)また、西欧では「下肥」を用いない栽培が一般的だったため、外国人避暑客向け(1952年までアメリカ駐留軍が軽井沢のホテルを接収)ということであれば、「下肥」を用いていないことを示す「浅間高原清浄野菜」のほうが、購買意欲をかきたてられる商品作物だったと考えられます。

肥料をめぐる日本の農業システムが、大きく変化していく理由の一端がこうした地域の資料からもうかがい知ることができます。

なお2008年(平成20年)に環境省の『環境・循環型白書』には「循環型社会の歴史」として下肥の歴史を紹介しています。「江戸時代のし尿の衛生的なりサイクルから」現代にも得るものはあると評価しています。こうした現代の人びとの「下肥」に対する意識の変化もまた、この資料の持つ意味をわたしたちに問うているように思います。
(学芸員・蒲原)

[商札(裏表)]には(検査証印31.8.25)が押され、1956年8月25日使用されたことがわかります。歴史民俗資料館蔵 ID

2025(令和7)年2月号

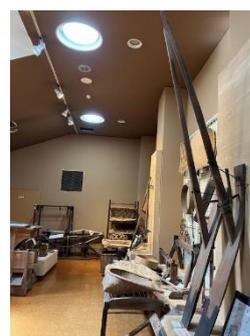
【収蔵資料】 民具をみる 「踏鋤(ふみすき)」

○1件のレファレンスから

昨年11月に、ある研究者の方から「そちらに収蔵されている「踏鋤・フミスキ」を調査させてください」と連絡がありました。こうした依頼は、所蔵先にいる職員が自館の資料について理解を深めるきっかけになることがあります。今回は、ある1件のレファレンスでお伝えした資料の説明内容をひろく紹介したいと思います。

○軽井沢町歴史民俗資料館にある踏鋤

フミスキは、同じ読みの犁(スキ)(牛馬に引かせて田畑を耕す畜力耕耘機のこと)と、区別するためにフミスキと呼ばれることが多いようです。『日本民具辞典』日本民具学会、1997)当館にあるフミスキは、写真のように、鋤(クワ)のような形をしているタイプです。人力耕起具に分類される点もクワと同様ですが、明らかにクワより大きいのが、このフミスキの特徴です。手前のフミスキの実際に柄の長さは170cmにもおよびます。



○使い方にみる特徴

このような巨大なフミスキをどのように使うのでしょうか。

その使い方は、『日本の民具』(慶友社、1965)に記されていました。「手前にひくのではなく、向うに押して土に鋤先をたて、土をおこしていくもので、原理的にはスコップと同様」。土をおこすには鋤(くわ)よりも深くおこすことができ、能率もあがります。しかし、湿田では用いることがむずかしい」とのこと。

つまりは力強く、深く起こす必要のある畑の土を耕すうえで効率よい農業用具といえます。このフミスキを寄贈してくれた方によると「軽井沢の離山で使用された」とあります。山がちな土地条件から、こうした力強く掘り起こすことの出来る農具が求められたと考えられます。

○記録に残るもっと詳しい使用方法

歴史民俗資料館の記録にフミスキの詳しい使用法が残されていたので紹介します。

- ①右手で柄のまんなか辺りからすこし上のところを持ち
- ②左手は肘をはって柄の一番頭のところを握り、両手とも手首をのばし甲は上を向いて
- ③右足を前、左足をうしろにして
- ④スキの刃を地面にたて、刃先をすこし土にさしこみ



1980年撮影：歴史民俗資料館所蔵写真

- ⑤右足をスキの台の後にかけ思い切って強く踏みこむ。後足はのびし前足はももを高くあげて歩幅を十分にとる。このとき「ふみっぱずすと、思わずガクンときて、息がとまりそうになる」。
- ⑥さらに、三度踏み込み、柄の付け根が土にもぐるくらいまでスキを地面に入れ、
- ⑦かけていた足ははずし、柄を押して土を掘り上げる
- ⑧そして今までスキにかけていた前の足を左足の後まで大きく引き、後ろへ退き
- ⑨今度は左手・左足を前にして土を右側におこす。

●常設展示替えの概報 鉄製品の展示に向けて

4月1日(火曜日)の開館に向けて、冬期休館中に常設展示の見直しを行いました。これまで収蔵庫にあった町内の中屋敷城跡(2017年油井中屋敷城跡から名称が変更)から出土した平安時代の鉄斧(ちょうな)、鉄鎌(てつぞく)などの鉄製品を展示し充実を図りました。これらの資料は平安時代の官道、東山道の存在を明らかにするうえで重要な資料とされています。それまでは、鉄製品の保存をめぐる扱いの難しさから展示を控えてきましたが、2016年(平成28年)に長野県立歴史館のご協力のもと保存処理が完了し、展示公開できるようになりました。ご来館のうえ、ぜひご覧ください。



展示予定の鉄製品の画像 (2016年撮影)